ティーチング・ポートフォリオ

日本国際学園大学 経営情報学部 ビジネスデザイン学科

山口和彦（YAMAGUCHI Kazuhiko）

日本国際学園大学
JAPAN INTERNATIONAL UNIVERSITY

目次

教育の責任 1

1. 何を担当しているのか 1

2. 担当科目 1

教育の理念 2

1. 英語を使いながら様々なことを学び続ける学生の育成 2

2. 「頑張ったからできた、楽しかった」を感じる授業 2

3. CLIL を意識した学び 2

教育の方法 3

1. CLIL を取り入れた授業 3

2. 講義におけるタスクの意味 3

3. 「できるようになった」を意識した授業 3

教育の成果 および 今後の目標 4

参考資料 4

教育の責任

1. 何を担当しているのか

全モデルの学生が対象となる必修科目の EAP Basic 1 及び EAP Basic 2 は、それぞれ週に 105 分の授業が２回あり、４単位の授業である。習熟度によってクラス編成された 20 名の学生に、2025 年度はカミングス先生と一緒に講義と演習を４つのパートで構成された授業を行っている。英語の４技能（読む・話す・聴く・書く）の力を、基本から応用まで引き上げられるような授業になっている。

秋学期に行う English for Academic Purposes は、グローバルスタディ系の選択科目であり、仙台キャンパスでは現代ビジネスモデル以外の学生が選択できる授業になる。カリキュラムツリー上では３年次に配置されているが、２年生にも履修できることになっている。EAP Basic の発展的な科目であるので、より社会的、学術的な内容を扱いつつ、英語を使いながら学ぶ授業となる。

2. 担当科目

現在（2025 年度現在）の担当科目とその概略は以下のとおりである。

科目名	対象学年	受講人数※	授業形態	必修選択	科目区分（カリキュラムにおける位置づけ）
(仙台)English for Academic Purposes	2	6	講義	選択	専門科目（グローバルスタディ系）
(仙台)EAP Basic1②	1	20	講義	必修	外国語科目（1年生対象必修科目）
(仙台)EAP Basic2②	1	20	講義	必修	（1年生対象必修科目）

※受講人数は過去の実績による平均受講人数

教育の理念

1. 英語を使いながら様々なことを学び続ける学生の育成

英語はコミュニケーションのツールです。このことを自転車という移動のツールで考えてください。ペダルを漕げば前進するとか、右のブレーキを握ると前輪のブレーキがかかる、という知識だけでは自転車には乗れません。どうバランスを取るのか、ハンドルを切る角度など、感覚的に覚えている知識もなければ自転車を運転することはできません。つまり、文法や単語の知識を持っているだけでは、コミュニケーションのツールとして英語を使うことはできません。

ツールとして英語を学ぶということは、読んだり聞いたりした内容を学ぶと同時に、英語も習得していくことです。使いながら様々なことを学ぶ楽しさを体験し、卒業後も英語を通じて世界を知り、世界で活躍する、そういう学生を私は育てたいと考えています。

2. 「頑張ったからできた、楽しかった」を感じる授業

学習者が高い関心や意欲をもって学びの活動に従事する心理状態のことをドルニェイ（Zoltán Dörnyei）はエンゲージメントと定義しています。これは、一時的なモチベーションの向上ではなく、学習者が主体的に学びに向かうための、より深く持続的な関与を指します。私の授業では、個人のトレーニングよりもペアやグループのトレーニングを多く用いており、意欲的に取り組むことで英語や教材の内容を覚えたり、使えたりするように構成しています。これによって高いエンゲージメントが必然的に必要となり、充実した学習体験を得ることができます。

3. CLIL を意識した学び

CLIL (Content and Language Integrated Learning)は語学力を計画的に高めるために、意図的に目標、内容、指導法、教材を選択して設計する語学習得の方法です。Content, Communication, Cognition, Community の４つの C を有機的に結びつけ、さらには記憶や理解といった低次思考力から分析、評価、創造といった高次思考力を駆使するタスクを設定していきます。したがって、各モデルのカリキュラムツリーにおいて、上の学年向けの科目になればなるほど、内容的に高次思考を求めるタスクが設定されることになります。過去の教え子たちから貰った私の授業評価では「教養が身につく」というものが多かったのは、英語力だけでなく、様々な内容について深く学ぶことができる内容を、使いながら身につけるためです。必修から選択の科目まで、充実した CLIL の学びを楽しめるよう意識した授業を行っています。

教育の方法

1. CLIL を取り入れた授業

前述の通り、私の授業では CLIL をベースにした授業を受講生に合わせて行います。まずは基本的な英文の作り方、話し方、書き方をしっかり身につけてもらい、オーセンティックな教材を用いて言語と内容を習得していくのが私の授業です。

2. 講義におけるタスクの意味

オーセンティックな教材で、かつオンラインによる個別学習を可能にするテキストを使用していますが、各ユニットの終了時にはタスクを設定しています。これはユニット内で学習した言語と内容を活用するアウトプット活動になります。学年が上がるにつれて、より高次の思考を必要とするタスクが設定されるので、思考力と英語力だけでなく、創造性も求められます。とはいえ、やっているうちに自然とそうした力を身につけられる、そういう計画で授業は進められるので、それほど心配する必要はありません。

3. 「できるようになった」を意識した授業

エンゲージメントが高い状態で授業を受けていれば、自然と「なんか出来るようになってきた」という感覚を得られるように授業は計画されています。少しずつ英語で話せる、書けるようになり、読める、聞き取れる、という感覚を得られれば、さらにちょっと難しいことにも挑戦できるようになっていきます。

周囲の受講者もそれは同様です。最初は苦手でも、１、２ヶ月もすると、「あの人前はあまり話せなかったけど、今では結構話せるようになってるな」と感じられるでしょう。そして、良いスピーチ、プレゼン、ディスカッション、ディベートを経験していく中で、もっと自分も良いものができるようになりたい、と思えるはず。

学校や大学の意味はそこにあります。エンゲージメントの高い学生から刺激を貰い、自分のエンゲージメントを高めていく。そういう環境を作るように意識して授業は行われます。

教育の成果 および 今後の目標

詳細は「授業改善報告書」を参照。

・EAP Basic では Q: Skills for Success のシリーズを使用しており、オンラインの個別学習について、進捗状況を教員が確認しながら取り組んでおり、正答率が 100%になるまで何度も取り組むように指導され、これまで全員が 100%になるように取り組んでいる。

・今後はグローバルスタディの専門科目において、より多様なタスクを設定し、英語で議論できる思考力と言語力を身につけられる授業を展開していく。

参考資料

・前職の高校教師としての授業については学校教育情報誌『VIEW next』に掲載された記事と動画(https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article15594/#modal-enquete)を参照。

・「ギャップ解消の取り組み 山形西タイプ」，『中高ギャップを埋める高校の英語授業 6 つの改善策』，金谷憲編著，大修館書店, 2024

・「進学校におけるアウトプット活動のある授業『山形西高版スピーク・アウト』」，全国英語教育学会第 40 回大会記念特別号『英語教育学の今-理論と実践の統合-』(http://www.jasele.jp/wp-content/uploads/kinen-tokubetsushi_web.pdf)，全国英語教育研究学会，2014